

ミーゼスの行為論

ハイエクとの主観性の相違

国士舘大学非常勤 伊藤理裕

1. 問題の所在

オーストリア学派の創始者である C.メンガーは、経済主体（むしろ主観といったほうがよい）の積極的役割を認め、経済社会全体の調和や秩序を説いた。諸個人の行為は主観を淵源とする価値に基づきながら、それがみごとに社会において有機的に結びつき「意図せざる結果」ではあるものの調和（秩序）を収束させる。諸個人の有機的社会現象はまさにスミスの「見えざる手」の役割を荷っているとしが言いようがない。

では、このような主観的価値を淵源とする社会秩序は何によって導かれるのか。それはメンガーのみならず、L.ミーゼスや F.A.ハイエクまでもが調和を実現する上で重要な要素として挙げている価格シグナルに他ならない。一般に価格は貨幣形態において表示される。メンガーは貨幣を交換という主観的経済行為の中から表象してくるものと考えた。特に彼は販売可能性という概念を用いて、交換行為の中から上位価値を有するものが貨幣として成立してくるとした。このような主観を淵源とする行為過程に着目した貨幣理論はミーゼスのカタラクシー、そしてハイエクの自生的秩序にも受け継がれている。いわば彼らが意図した経済学は人間行為を対象とするものといえる。

一般に貨幣は客観的なものであると見なされているが、彼らの方法論からすれば、貨幣価値といえども主観主義の観点から外れることはない¹⁾。それはミーゼスの次の文章に表れている。「近代の価値論および価格論によれば、価格は市場で遭遇する商品および価格財の主観的価値評価の結果である。すなわち価格は始めから終わりまで主観的価値評価の産物である」²⁾。このように交換を行う諸個人は交換される財貨を主観的使用価値に従って評価し、その交換比率は市場における需給関係によって決められるとする。

このようなメンガーからの系譜は貨幣の主観的使用価値および交換価値を財の限界効用によって説明する。ただこのときミーゼスは主観的側面にのみ焦点を当てるのではなく、客観的認識をも重視する。「主観的貨幣価値の考察はその客観的交換価値にかかわることなくしては不可能であり、貨幣においては客観的貨幣価値、購買力の存在が使用の欠くべからざる前提である」³⁾と述べるように、貨幣価値には主観と客観の二つの価値が含意されている。したがって、彼らの意図する主観主義的貨幣を分析する場合、主観的価値と客観的価値との紐帯を明らか

にしなくてはならない。つまり主観主義の観点から捉えられる貨幣が如何にして客観的な価値秩序と結びつくのかという解明である。だが、この点に関して彼らは、価値が主観性および客観性を帯びるプロセスを明確に示していない。そこで本報告では、主観と客観の紐帯はどこにあるのかを、彼らが依拠しているカント哲学の上から明らかにし、両者における主観性の相違を考察する。

2. 社会科学における科学性

ミーゼスとハイエクは人間行為を科学性として一貫して扱ってきた。それは彼らが行為者自身の目的・価値意識・判断といった観点から社会現象にアプローチする点に表れている。彼らがこのような経済学を展開する理由は、あくまでも社会は「個」が作り出しているという個人主義の立場にあるからである。ただ、このとき社会は諸個人が構成しているといえども社会現象は個人の意図したものでなく、あくまでも「意図せざる結果」でありながら個人に還元される。では、どのようにして個人と社会秩序は結びつくのであろうか。ここに何らかの紐帯を発見しなくてはならない。

この問題を解明するためにはカント哲学の超越論的演繹に委ねる必要がある。つまり、われわれは社会を設計的できるわけではなく、諸個人の思惟には理性の誤謬が内在しており、それを除去して社会を構築していくという視点である。このような方法論としてカントはアプリアリ⁴⁾なカテゴリーから出発して演繹的推理を進めていくのであり、その上であくまでも人間行為から出発し秩序を形成していく。ミーゼスはこれをうけて「人間行為は演繹的体系である」⁵⁾と述べているのであり、演繹の下で行為が議論されねばならない。

このように秩序という体系を契機として演繹が展開されるのであり、そのため経済学は実証的に議論されるものではなく、体系的にかつ論理的に議論されねばならない。あくまでもわれわれは秩序に向けて理性の誤謬を排除して社会を構築していく必要がある。それは、われわれ人間が社会において中心的位置を占め采配を振るう以上、主観が問題となるからである。そのような主観を扱う社会科学では演繹的体系が科学性として求められるのである。彼らはこのような演繹的体系の中で社会を捉えているのであり、その意味で貨幣もこの演繹的体系の中に置かれなくてはならない。

3. 演繹的体系

では、社会科学を科学ならしめる演繹的体系とはどのようなものか。それは具体的にはカントの認識論や判断力の中に見出される。理性の誤謬を排除するための理性批判や判断力批判という超越論的哲学を展開した。認識を可能にするため

の原理としてアприオリを通じて総合される。その事情をカントは「すべての認識は経験とともに始まるとしても、だからといって必ずしもすべての認識が経験から生ずるわけではない。……われわれ自身の認識能力が(感性的諸印象によって単にきっかけを与えられて)自己自身から供給するものことから合成されたものである」⁶⁾と述べている。つまり認識とは経験から得た対象をアприオリな純粹直観やカテゴリーを通して構成されるものと考えられる。このような認識は「われわれの認識はすべて対象に従う」⁷⁾とされているのに対し、これを逆転させて「対象がわれわれの認識に従わねばならない」⁸⁾とした。認識とはわれわれ人間側が構築するものであるというコペルニクス的転回に現れている。すなわち知識や感覚、データといった経験的对象は純粹直観(時間・空間)を経てカテゴリーという純粹悟性概念に渡されてまとめられる。

ただ、このとき超越論的カテゴリーを通して認識するとは、決して経験を軽んじることではない。「アприオリに総合的に考えられていたものをアポストオリに分析的に再び提供し、これ[概念]に合致する。したがって、単一性、真理性、完全性の概念によって、カテゴリーの超越論的表は、決してそれがあたかも不備であるかのごとく補足されるのではなく、ただ、客観に対するこれらの概念の関係が完全に一掃されることによってのみ、諸概念に関わる手続きが認識の自己一致の一般的論理的規則のもとにもたらされるのである」⁹⁾。よって、全ての認識は経験に端を発しながらも、主観に与えられた悟性概念のカテゴリーによって客観化される。すなわち経験といえども、それは所与の対象をアприオリな認識能力を通して構成される。ゆえにアприオリとは経験に由来しない普遍妥当な論理の契機を持ちながら経験を経験ならしめる、ということの意味する。このような超越論的演繹によって人間行為もまた客観が可能になる。このような論理を踏まえて、われわれは社会・経済現象を認識している。その意味で経済学は論理学の一つであると考えられる。

ミーゼスもカント同様にカテゴリーからの論理的推理による演繹を展開する。それは『ヒューマン・アクション』や『経済学の根底』の中に見られる¹⁰⁾。ミーゼスにおけるアприオリズムはカントの超越論的演繹であり、それゆえ主観を淵源としながらもアприオリなカテゴリーを通じた論理的推理による演繹は必然的に客観を編み出す。ここに主観と客観が一つとなっている。

4. アприオリの置き方の相違

ミーゼスはカントの演繹に依存していることは明らかだが、ハイエクも同様に主観主義の認識論を展開する。先に述べたように主観主義はカテゴリーという概念の下で構成されており、一つの秩序を成すものである。これがハイエクにも受

け継がれており、彼の根底に据えられている。ただ、ハイエクはミーゼスほどア
プリオリな部分を強調したりはしない。それはハイエクが個人を社会という非人
格的な世界に置き、反証と審判を待つという視点に立っている。すなわち主観の
誤謬を補うために社会的功利に委ねるのであり、市場はまさにその役割を担っ
ていると考えられている。ここにミーゼスとハイエクにおける演繹の相違が見られ
る。いわば先験性で社会を純化するというよりも、社会の判断に委ねる点でハイ
エクはよりヒューム的であるといえる。

このような経験に依存する方法論を展開するが故に、ハイエクは「経済学と知
識」において意図的にミーゼスのアプリオリズムを批判している。彼はこの論文
を書いた意図を次のように説明している。「ミーゼスが市場の理論はアプリオリ
[先験的に真]だとしているのは間違いだ、ということを彼自身にわかってもら
おうとして書いたものなのです。アプリオリなのは個人の行為の論理だけであって、
それからの多数の人間の相互関係へと進む瞬間に、あなたは経験的領域に入るこ
とになる、ということなのです」¹¹⁾。このようにハイエクはアプリオリの有効範
囲は人間行為に関わる部分のみだけであり、諸個人が織り成す社会現象に関して
はアプリオリの射程ではなく、そこからは経験が重要な役割を成してくるとい
うことを強調している。

経験を重視して議論を展開するハイエクからすれば、ミーゼスの方法論はあま
りのも先験的なものの強調と映ったのかもかもしれない。しかしミーゼスは経験を軽
視しているのではない。「行為のカテゴリ－的前提条件が具体的事例に存在してい
るか否かは、経験のみによって確立できる」¹²⁾と述べている。さらに演繹は価値
基準をもとにするがゆえに、「価値判断の現実的内容は経験のみから導き出すこ
とができる」¹³⁾と経験の発見的役割を指摘している。ただ、ミーゼスは人間行為の
先験性に足場を置いたために、ハイエクのような経験的に秩序体系に導かれる個
人と比べ、主観における演繹に閉じ込め過ぎたのではなかろうか¹⁴⁾。

このようにミーゼスは先験的な部分を前面に押し出し、それに対しハイエクは
経験主義、つまり非人格的社会の判断に委ねた。両者とも価値意識を入れたア
プリオリを受け入れるとしても、経験を重視し未来に向けた構築に軸足を置いたハ
イエク、先験的（超越論的）演繹というプラクシオロジーに軸足を置いたミー
ゼスという相違が見られる。両者とも人間行為におけるアプリオリと経験による融
合を意識し、調和（秩序）に従うべく行為論を展開する演繹に変わりはない。た
だ、ミーゼスは経験的側面を疎かにしたわけではないが、アプリオリな側面を強
調し、その観点から社会秩序や調和を説いた。このアプリオリの強さが両者の主
観主義な解釈に差異が生じている。

5. 制度的含意

秩序を契機とする演繹論を展開した両者であるが、主観をアプリアリの中で純化したミーゼスと、社会の審判に委ねようとしたハイエクという相違が見られた。このような両者の相違は貨幣概念においてより具体的な相違となって現れる。彼らは自由主義の立場から国家の政策的介入に懐疑的であり、フリーバンキングを支持している。フリーバンキング、すなわち複数通貨競争制度とは民間銀行同士が独自の通貨を本位制度に基づいて発行し、市場で流通し合うシステムを意味する。そのようなシステムにおいて経済主体は、どの通貨で売買を行うのかを任意に決定することができるのであり、それは市場で安定的な価値を維持している通貨が好まれるようになる。

ミーゼスはフリーバンキングにおいて発券準備に金を提唱するように、最終的には貨幣を金であると見なしていた。これはミーゼスが、カントの超越論的論理学から得た主観性に依存した結果であると考えられる。彼は主観的使用価値から客観的交換価値を経て貨幣が成立するという統一した流れを示すが、この主観を淵源としながらも客観的な貨幣の表象が成立するというプロセスは正にカントの超越論的論理学なくしては成り立たない。すなわち主観を淵源としながらもアプリアリなカテゴリーを通じた論理的推理による演繹は必然的に客観を編み出す。このとき彼が金に固執するのは、先験性というプラクシオロジーに軸足を置いたための結果であろう。

他方、ハイエクはカントのアプリアリに依拠するところがありながらも、よりヒューム的であり経験的であった。それはハイエクがフリーバンキングにおいて商品準備を提唱する点に現れている。そのとき商品とは何でなくてはならないのかを問うことではない。むしろ社会の判断に委ねることによって、その反省的行為の中から決まってくるという慣習を重視する観点に立っている。いわば社会の意見を取り入れて通貨制度を模索していくのが商品準備であるといえる。このように両者において主観主義の観点から貨幣を捉えるということに相違はない。ただ、アプリアリの置き方に差があるために、ミーゼスはより貨幣を純粋なものへ収束していく傾向が見られ、一方、ハイエクは新たな発見に基づく貨幣を受け入れるような立場を社会性として取り入れるという相違がある。

1) Jeffrey, M. H. "Ludwig von Mises on the Gold Standard and Free Banking" *The Quarterly Journal of Austrian Economics*, vol.5, no.1, Spring, 2002, pp.67-91.

2) Mises, L. *Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel*, zweite, neubearbeitete Aufl, Munchen; Leipzig: Duncker & Humblot, 1924, S.85. (東米雄訳『貨幣及

-
- び流通手段の理論：近代経済学古典選集 13』日本経済評論社、1980年、91頁)
- 3) *Ibid.*, S.74. (同上書、80頁)
 - 4) 一般に a priori は先験的と訳されるが正確には超越論的 (Tranzendental) を用いるべきである。何故ならアプリアリとは経験に先立ってというよりも経験とともに始まる認識だからである。
 - 5) Mises, L. *Human Action: A Treatise on Economics*, New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1949, p.68. (村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社、1991年、91頁)
 - 6) Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft*, Philosophische Bibliothek Band, 1787, S.1-2. (有福孝岳訳『カント全集 4：純粋理性批判 (上)』岩波書店、2001年、67～68頁)
 - 7) *Ibid.*, S.XVI. (同上書、33頁)
 - 8) *Ibid.*, S.XVI. (同上書、33頁)
 - 9) *Ibid.*, S.115-116. (同上書、163～164頁) カッコ内筆者加筆。
 - 10) Mises, L. *The Ultimate Foundation*, pp.15-16. (前掲書、19頁)
 - 11) Hayek, F.A. *Hayek on Hayek : an autobiographical dialogue*, edited by Kresge, S. and Wenar, L., Chicago, University of Chicago Press, 1994, p.72. (嶋津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』名古屋大学出版会、2000年、60頁)
 - 12) Mises, L. *Epistemological Problems of Economics*, translated by Reisman, G., Princeton: D. Van Nostrand Company, Inc, 1960, p.73.
 - 13) Mises, L. *Theory and History: An Interpretation of Social and Economic Evolution*, New Haven: Yale University Press, 1957, p.311.
 - 14) Mises, L. *Human Action*, p.32. (前掲書、55頁) および Mises, *Epistemological Problems*, p.12. を見よ。